

共同研究

アジアのなかの日本

—東アジアと日本—

1992年度の研究活動を振り返って

主任研究員 清水 稔

「アジアのなかの日本」研究班は、アジアのなかで日本をどう位置づけるかを課題として出発した。その分析にあたっては、第一に日本と古くから深い関係にあった朝鮮・中国等のいわゆる東アジアと日本との交流の過程を重視すること、第二に「日本・中国・朝鮮等のいずれかの地域を研究ベースとしながらも前者を視野に入れた考察をすることにした。副題を「東アジアと日本」とした理由はここにある。東アジアと日本の交流の過程は、一方的なこともあれば、相互に関わりあうこともあった。その内容も、文化的・社会的・政治的・経済的なこと等さまざまである。交流にはもちろん侵略も伝播・影響も含まれていることはいうまでもない。本研究は、このような交流の諸過程を分析することによって「日本と東アジアとの諸関係」を明らかにするとともに、さらに言語・民俗・文学・思想等の比較分析を通して「日本と東アジアのそれぞれの特質」を浮かび上がらせることにある。以上のような前提にたち、研究を進める柱として、(1)前近代の日本と東アジア、(2)近現代における日本と東アジア、(3)東アジアの文化と日本、の3本を設定した。(1)では主として古代中国と日本の関係について、文化の源流を考える視点でとらえ、(2)では明治以降の日本と中国・朝鮮との関係について、歴史の面と文化の面から考察し、(3)では民俗学・社会学・言語学・文学の分野から日中朝の諸様相とその差異を探ることにした。

わが研究班では、まず研究報告のスタイルによる班運営をすること、研究員が上記3本の柱のいずれの領域を選択するかは自由とするが、ただ班員の共通認識として東アジアとくに中国・朝鮮と日本との関係を視野に入れた報告をすること、等を確認し

て、研究活動がスタートした。一見とりとめのないように見えた研究会も、1992年度を振り返ってみると、15回の研究会、延べ19本の研究報告（その内、会外から招いた講師による特別報告3本）は実に多彩な話題を提供したし、専攻分野の多様さを反映して、東アジアを考える問題意識や視点、史料の分析手法やアプローチ等々の多様性を浮き彫りにし、研究員相互の研究視角に大きな刺激を与えた。わが研究班は、課題を何か一つのものに収斂させる努力をあえてしなかった。「東アジアと日本」という大きな課題を、いろいろな角度から各研究員の好みに応じて自由に切り取り、それぞれの調味料で自由に味つけしながら、研究員各位の賞味に供し、批判を仰ぐ形をまもり通した。2年の研究期間はあまりにも短い。むしろ4年5年のスパンで行なってこそ、味わいが出、課題が深まる班運営かもしれない。それはプロジェクト運用の今後の課題としなければならないであろう。

1992年度の研究班活動とくに研究会における班員各位の報告要旨は、すでに『佛教大学総合研究所報』第3号（1992年11月1日）と第4号（93年5月1日）に掲載されているが、92年度の班活動の全体像と本紀要掲載論文の成立過程について理解を深める一助になればと思い、あえて活動の経過を記すことにした。

まず(1)の領域にかかわる報告から紹介しよう。特別講師安志敏（中国社会科学院考古研究所研究員、考古学専攻）は、日本古代文化のルーツとして東シナ海ルートを重視し、江南文化と縄文・弥生文化との関連性について稲作農耕・高床式建築・玦状耳飾・漆器・鬲状土器・石斧の着柄方法等を例に論証した（92年4月7日）。杉本憲司（本学教授、東洋史学専攻）も、江南文化と弥生文化との関連について、水稻耕作・紡織・断髪文身・鬼道・鳥トーテム等を素材に明らかにした（93年1月28日）。河野通明（本学非常勤講師、日本史学専攻）は、紀伊半島と山口の首木を例とする日本在来の犂の牽引方法から、アジアにおける犂耕の伝播経路 — 西アジア系の二頭引き牛耕技術がシルクロードを経由して北中国に伝わり、その後それが中国本土と朝鮮半島を並列して南下し伝播したこと — を考察した（92年5月21日）。また河野は、中国における親耕親蚕儀式と耕織図を取り上げ、それが朝鮮・日本にいつ頃伝播し、それがどのように受容されたかを追跡、受容の違いとその後の変容は、耕作方法および国家と民衆の農業の関わり方の相違の反映であると指摘した（92年1月14日）。山口修（本学教授、仏教文化専攻）は、野中寺弥勒台座の銘文を素材として、古代天皇の呼称問題等を中国との関連のなかで追求した（92年4月23日）。徳永洋介（本学非常勤講師、東洋史学専攻）は、民衆の紛争解決に国家がどのように関わったかという視点にたち、国家と社会の接点で法が果たした役割を南宋と江戸期を比較しながら分析し、その異

相を明らかにした(92年12月17日)。

(2)の領域では、吉田富夫(本学教授、中国文学専攻)が、魯迅の日本観を考察する前提として、日本留学時代の回想、日本文学の翻訳・紹介、日本人との交流を取り上げて分析し、魯迅が自民族の弱点に敏感だったこと、同時代の日本文学をさほど認めていなかったこと等を指摘、魯迅の日本観は従来考えられてきたよりかなり屈折していたと総括した(92年10月1日)。三谷憲正(本学専任講師、国文学専攻)は、夏目漱石の朝鮮観を取り上げ、それに関する先行研究を根底的に洗い直すべく、まず『漱石全集』のなかから朝鮮を言及している部分を抽出し、その用例を分析した。そのなかで全集未収録資料を発見し、朝鮮民衆に対する漱石のキーワードとして「同情・気の毒」を抽出、また漱石の帝国主義的側面を醸し出す背景等をも明らかにした(92年11月12日)。森本正一(本学教授、教育学専攻)は、日本では大正デモクラシー期、中国では五四運動期の、いわゆる同時期に日本と中国を訪れたデューイの思想が、それぞれの教育界にどのように受けとめられたのか、また彼の主張がなぜ日本では受容されないで、中国ではきわめて大きな影響をその後も与え続けたのか等を分析した(92年10月15日)。清水稔(本学教授、東洋史学専攻)は、対華21か条要求を契機とする日中関係の大きな変化について、中国人日本留学生と日本人中国政府顧問・教習等のいわゆる文化交流レベルの実体分析を通して解明するとともに、対華21か条要求そのものと現実に発効した2条約13交換公文の比較を通して、日本が獲得しえた権益が一体何であったかを明らかにした(93年1月28日)。山口は、朝鮮開国期の「朝鮮元首」の呼称問題を日本・中国の天皇・皇帝の呼称と対比・関連させながら、朝鮮の置かれた立場を明確にした(92年12月17日)。原田敬一(本学助教授、日本史学専攻)は、日清戦争研究で見落とされている軍夫問題を取り上げるにあたり、まず戦前前後の歴史教科書のなかで日清戦争像がどのように描かれているかを検証した(92年11月26日)。

(3)の領域では、豊福陽一(高野山大学助教授、社会学専攻)が、韓国と日本の漁村を事例として取り上げ、近代化を軸として両国の「むら」の指導者と「むら」の自治の変容・変質過程の差異を明らかにした(92年6月4日)。八木透(本学専任講師、日本史学専攻)は、構造的には親族集団の諸相、イエの構造、祖先祭祀継承権をめぐる規範が、実態的民俗に即しては祖先祭祀に参加しうる人々の実態とその際の女性の役割が、それぞれ重要な意味をもつとの視角にたって、日本と韓国におけるイエ・家族・祖先の比較民俗学的考察を行なった(92年6月18日)。政岡伸洋(本学大学院生、日本史学専攻)は、稲作文化圏という共通項を軸に、日本と韓国の収穫儀礼についての類似点と相違点を抽出した(92年7月2日)。特別講師竹田旦(創価大学教授、民俗学専

攻)は、韓国家族における嫁・姑関係の深刻さを婚姻習俗・家族構成・家族観・主婦権から分析し、それが日本の東北・北陸の家族関係に近いことを指摘した(92年10月29日)。特別講師岡山善一郎(天理大学講師、ハングル専攻)は、韓国の婦女子の遊戯カンカンスオレの歌謡に焦点をあて、カンカンスオレの実体と、歌掛けについての日韓比較考察を試みた(92年7月2日)。申禮淑(和歌山大学非常勤講師、国文学専攻)は、川端康成と黄順元の文学作品にみられる季節感の相違を比較検討し、川端は「文学的美的」概念で、黄は「自然の摂理」の概念で季節感をとらえているとした(92年7月16日)。中野迢(武庫川女子大学教授、栄養学専攻)は、中国・韓国の日本留学生在が「健康と食事」のなかでそれぞれ伝統をどのように維持しているかについて、日本のそれと比較検討を試みた(93年1月14日)。

以上が研究班活動の全容である。各領域を通読していただければ、そのなかから「アジアのなかの日本-東アジアと日本」の多様な姿がおのずから浮き彫りにされるであろう。結論めいたものをあえて出すことを避け、すべては読者の判断に委ねることとする。

最後に本紀要掲載の論文・研究ノートを研究班活動のなかに位置づけるコメントを付して締めくくりとする。

(1)の領域では、河野通明が日本で犂が生まれたとする学説が成立しないことを東アジアの農業技術との関連のなかで鋭く分析している。(2)の領域では、三谷憲正が夏目漱石の朝鮮観を『漱石全集』の用例分析を通して明らかにし、日本の知識人の朝鮮に対する認識の一端を浮かび上がらせている。山口修は朝鮮開国期の朝鮮「元首」の呼称問題について外交文書を丹念に分析し、呼称を通じて近代における日本・朝鮮の位置を明らかにした。清水稔は対華21か条要求の原案・修正案・成案の具体的な分析を通して、対華21か条要求のなかで実現した項目を明確にするとともに、そこで確保した権益をいかに保持するかがその後の日本の対中国外交の重要課題であったことを論証している。研究ノートではあるが、北西弘(本学教授、日本史学専攻)は明治初期における東本願寺の中国布教の歴史を史料を通して丹念に追跡し、原田敬一は日清戦争を民衆の立場から再検討するために、兵站の重要な部分を構成しながら注目されることのなかった軍夫に関する史料を発掘している。北西・原田の史料発掘は、ともに貴重な歴史の一頁を切り開くものである。(3)の領域では、申禮淑が川端康成と黄順元の文学作品を素材として、日韓における季節感についての表現の違いを探ろうとした。八木透は、研究ノートとして日韓における家と祖先崇拝を比較研究するにあたっての研究視点と課題を明らかにしている。

以上が本紀要掲載論文・研究ノートの概要であるが、各論稿はあくまでも各研究員の責任のもとに執筆されていることを付記しておく。また1992年度の研究成果を他雑誌に掲載された研究員の諸論稿を紹介しておく。(1)の領域では、杉本憲司が「呉越文化の鳥」を佛教大学『鷹陵史学』19号(94年3月12日)に、徳永洋介が「南宋時代の紛争と裁判 — 主佃関係の現場から」を京都大学人文科学研究所『中国近世の法制と社会』(93年3月3日)に、(2)の領域では、森本正一が「日中の教育比較論 — デューイの影響を中心に」を佛教大学『教育学部論集』5号(94年3月1日)に、吉田富夫が、「抗日戦争期の陶晶孫」を立命館大学『立命館国際研究』6巻3号(93年12月19日)にそれぞれ発表された。併読をおすすめする。

なおここに記した各研究員の研究会報告および紀要論文等の概要は、研究班を主宰した清水がまとめたものである。その論旨を取り違えているとすれば、その責任はすべて私にある。ご寛恕を乞う次第である。

付記：文中の()内の日付は報告日あるいは刊行日を示している。

また研究員の所属・職階は1992年度のものである。